E 14

高齢者の生活時間構造と生活意識

岡山女子短大　時岡晴美

〈目的〉　1日の生活行動を時間の面からとらえた場合、生活行動の行なわれ方には、いくつかのパターンが存在すること、基本的属性により差異が認められることなど、数々の法則性の存在が明らかにされている。筆者もこれまで生活行動の法則性を時間の面からとらえてきたが、パーソナリティ・生活意識など生活者の内面と、行動パターンとの関わりをとらえることが課題とされていた。そこで、本研究においては、日常の生活行動が、公的生活に左右されることの比較的少ないと考えられる高齢者を対象として、生活行動を時間の面から、生活者の内面を生活満足度などの生活意識からとらえ、両者の関連性を探ることを目的とする。

〈方法〉　岡山県・広島県に在住する60歳以上の比較的健康な高齢者72名を対象とし、昭和60年12月に、直接観察法による生活時間調査、及び聞きとり法による生活意識調査をあわせて実施した。生活時間調査については、時間の精度を30秒として行動内容を具体的に記録し、行動した場所・共に行動した人についても同時に記録した。

〈結果〉　生活時間構造では、起床時刻は午前6時から6時30分までが多く、就寝時刻は午後8時から11時30分までとばらつきが大きい、1日のうち居室ですごす時間が長い、などの特徴が認められ、生活意識では、経済状態・住居の状況・環境などについて、だいたい満足していた。また、生活時間構造と生活意識との関連では、くらしむきに対しての満足度が高い人は、1日の行動時間が長く、行動項目の種類が多く、接する人の数が多いなど、特に、生活時間構造と生活満足度とのかかわりが認められた。